

市教育委員会では、本證寺が「城みたい」と言われるきっかけの一つになった、外堀と内堀がどこにあったのかを確認するための発掘調査を続けています。

今回は、江戸時代後期に描かれた「本證寺伽藍絵図」(以下、絵図)に描かれたとおりの場所に堀が埋もれていた例を紹介しました。今回は想定していなかった場所から堀が見つかった時の話です。



写真1 池として残る外堀

今も地上に残る堀

江戸時代、外堀に囲まれた範囲は「寺内」と呼ばれ、主に本堂のある境内の東側に本證寺を支える人々が住んでいました。絵図には「百姓家」と書かれています。発掘調査では、碗や播鉢など瀬戸焼の日用雑器のほか、製鉄に使用した道具なども出土しています。

外堀は、戦国時代には本證寺と寺内を守るという役割を担っていましたが、平和な江戸時代には、寺内を区画する役割と三河を代表する大寺院としての権威を示すという役割に変化したと推測されます。

外堀の大部分は現在地中に埋もれていますが、一部地上に残っている場所もあります。その一つが三角形の池となっている場所です。(写真1)この池は、絵図に描かれている寺内東側の出入口に離接する外堀の一部だと考えられて



図1 「本證寺伽藍絵図」東部分 寛政年間(1789~1801)

きました。(図1・以下外堀(池))

この外堀(池)の東側、つまり寺内の外側にも本證寺と関連する遺跡があるのか確認するために発掘調査をしました。

いままで堀だと思っていたけど、堀じゃなかった!?

調査の結果、外堀(池)から数m離れた場所から別の堀が見つかったのです。(図2・写真2)いままで堀の一部だと思っていた外堀(池)は、堀ではなかったのでしょうか?

この新たに見つかった堀(A)は、戦国時代に掘られ短期間に埋まったことがわかりました。前回、堀の大部分は三河一向一揆後に埋まり、それをまた江戸時代に掘り直しているという説明をしました。しかし、この堀(A)は、一揆後に間もなく埋まり、再び掘り直されることはありませんでした。江戸時代には外堀(池)の場所につながるかたちで新たに堀を設けたようです。

なぜ、ここだけ戦国時代と違う場所に堀を掘ったのかは、明らかにではありません。堀の全体像は今後の調査に期待してください。



図2 戦国時代の堀(A)と江戸時代の外堀(池) 発掘調査場所は埋め戻されており、見ることはできません。



写真2 戦国時代の堀(A)と江戸時代の外堀(池) (東から撮影) わずかに本堂の屋根が見えます。